第2課　見て、欲して、手に入れる

【暗唱聖句】

「茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である」マタイ13:22

【今週のテーマ】

サタンは金銭に心が奪われるように心を惑わせます。その結果神の民から離れていくことを知っているからです。今週は悪魔の策略に対抗する力を聖書の中から学びます。

【日曜日・繁栄の福音】

アメリカで最も大きな教会の一つであり、テレビでも人気の有名な牧師は「神様を信じれば祝福され財産が増えるでしょう」と語ります。このような信仰と経済を結びつける考えを「繁栄の福音」と言います。確かに神様はわたしたちを経済的に支えて下さる方です。しかし、それが福音ではありません。経済的な繁栄は一時的なものであり神様が下さる永遠の命に比べることもできないものです。しかし、悪魔は教会の中にこのような教えを巧みに引き込ませ、信仰者にとって何が最も大切なのかをわからなくさせています。

　繁栄の福音では、神様に捧げればその見返りとして神様はさらに物質的な富を与えてくれると説きます。これではまるで神様と取引しているかのようです。確かに神様はわたしたちにいつも良いものを与えたいと思っておられることでしょう。しかし、それは見返りを求めて取引をするようなものではないのです。

息子さんの大学進学の学費で困っていた人がいました。そこである人が学費を援助しましょうと申し出て下さいました。この突然の申し出にとても喜びました。ところが父親は急に不安になったのです。学費を出すと言っておきながら途中で止められては困ります。そこで父親は、学費を出すということを文章できちんと書いてくれないだろうかと頼んだのです。すると、この学費援助の申し出をしてくれた人は、自分のことを信用していないのかと不満に思い、この申し出を取り下げてしまったのでした。

確約は欲しい、口約束だけでは不安というこの父親の気持ちもわかります。しかし、申し出てくれた人にとっては自分の行為が、取引のようになってしまうことを面白く思わなかったのもわかります。神様に対しても、わたしたちは経済的祝福や支えを取引するのではなく、ただ信じていくことが求められているのです。

【月曜日・雲らされた霊的視力】

この世のものはすべて一時的なものであり、永続するものはありません。だから、わたしたちが最も真剣に目を注がなければならないのは一時的なこの世の目に見えるものではなく、目に見えない永遠の世界なのです。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」第二コリント4:18

このみ言葉を意味する真実を頭で理解していても、目の前のことばかりを見つめて、それが永遠の世界よりも大切であるかのように思ってしまうことがないでしょうか。この世の富も思い患いも、永遠の世界からわたしたちの目を遠ざけます。霊的な近視眼、あるいは霊的な盲目は、大切なイエス様を見えなくさせます。これは大変危険な状態にあることを自覚する必要があります。わたしたちが見つめるべきは見えない者、永遠なる者、イエス・キリストのみです。

【火曜日・貪欲の階段】

貪欲は心の中から始まります。そしてそれが徐々に外に向かっていきます。エデンの園で最初の誘惑が起こったときの光景について次のように描写されています。

「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」創世記3:6

エバは誘惑の実を「見ました」。イエス様を見つめるべき目が誘惑の実に注がれていたのです。すると心の中でこの実を食べれば賢くなれる、もっと賢くなりたいという誘惑が生じました。そして手を触れ、食べたのです。彼女は十分素晴らしい理解力を与えられていました。それ以上必要とする賢さなどなかったはずです。悪魔の誘惑は次のようなものでした。

「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」創世記3:5

目が開かれるという誘惑…しかし逆にそれは霊的盲目に陥ることにほかなりませんでした。

神様のように善悪をしるものとなるという誘惑…しかし罪を知った結果、それを克服しなければならないという人間の能力以上の問題を抱えることになりました。つまり、アダムとエバは目の前の魅力的な事柄だけを思い、それに伴う重大な結果まで思いを向けることができませんでした。

心の中で罪が始まります。だから、心の中にいつもイエス様に住んでもらう必要があるのです。この世の住んでいる以上誘惑は来ます。その誘惑に心を支配させない力は、イエス様からのみ来ます。

【水曜日：貪欲―物を自分の好きなようにすること】

「この犬どもは強欲で飽くことを知らない。彼らは羊飼いでありながらそれを自覚せず、それぞれ自分の好む道に向かい、自分の利益を追い求める者ばかりだ」イザヤ56:11

人間が貪欲になってしまうのは簡単です。しかし、それは最も神の国に相いれない性質です。イエス様は自ら貧しくなられたことを思うと、そのことがよくわかるのではないでしょうか。

「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」第二コリント8:9

貪欲は争いや犯罪の原因ともなってきました。まるでウイルスのように人々の心をむしばみます。ユダはイエス様を裏切るときただ裏切ったのではなく、その見返りとして金銭を要求しています。

「そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした」マタイ26:14，15

ユダの心の中に巣くっていた貪欲さは、イエス様を裏切る気持ちとも関係していたのでしょう。そう考えると、貪欲が神様から人の心を引き離すものとなるという良い実例でもあるのです。

【木曜日・自制】

欲望に打ち勝つためには自制心が求められます。ではどのようにしたら自制心を持つことができるのでしょうか。これは信仰者の生き方になくてはならない要素の一つです。

「だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい」第二ペテロ1:5～7

ペテロが語る最初の一歩は、「信仰」でした。わたしたちを罪から救い、永遠の命を与えて下さるイエス様への信仰がすべての土台となります。この信仰という土台の上に「徳」を加えるようにと続きます。信仰だけでは足りないということです。信仰は神様とわたしとの一対一の関係ですが、他者との関係を深めていくことなしに、神様の本性に預かることはできません。徳というギリシャ語アレーテーは、男らしい、勇気、奉仕、貢献という意味がある言葉で、エリートの語源となっています。つまり徳とは、自分を犠牲にして、男らしく勇気をもち、奉仕していくことを言います。しかし、徳だけでもまだ足りません。そこに知識を加える必要があります。独善的な奉仕は押しつけとなり、逆効果になることも少なくありません。だから正しい判断力を与えられるように知識が必要です。また、その知識とはイエス様に基づく正しい知識です。イエス様に対する正しい知識が欠落していれば、正しい聖書的な行動や判断ができません。「知識」に加えるべきことは、「自制と忍耐」です。時に正しいとわかっていても、良い時を待たなければならないことがあり、自制と忍耐を強いられることも多いです。気もちばかり焦ってもうまくいきません。「信心」とは、神様への礼拝を捧げる敬虔さを表します。そして同じ礼拝を捧げる兄弟姉妹への「愛」、さらにその上にすべての人への「愛」と続き、頂点に達します。このような一連の流れは実はすべて聖霊の働きです。

「これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう」ガラ5：22～25

霊の結ぶ実は愛でありと、第二ペテロ1:5～7の結論で導き出された愛について教えています。そして、この愛は聖霊によるのですから、欲望に打ち勝つためには聖霊の導きに従って生きることが必要であることがわかります。つまり、自分の力で欲望に打ち勝つことはできないからです。欲望に打ち勝つ自制心が与えられるように神様に祈り、委ねていきましょう。聖霊が働かれると、欲望は消えます。欲しかったものや興味のあったものが飽きてしまうようになります。